

創生

目次



《夏》

第三十七卷第二号通巻百四十六号

嘶馬集「草笛」……………	山口 美智	2
「余生かく」……………	屋内 修一	4
「日永」……………	石井 九峰	5
「花の道」……………	菅 風花	6
「春寸描」……………	米田由美子	7
虹座……………	松本 直美他	8
百花漫步（嘶馬集・虹座欄鑑賞）……………	荒木 正夫	16
詠花吟月「夏の島」……………	上南木はるひ	17
「犬の主張」……………	小野 康恵	17
七夕……………	瀬崎 栄子他	18
共鳴句（七夕欄）……………	山口 美智	27
花菜……………	櫻田 文雄他	28
共鳴句（花菜欄）……………	山口 美智	37
春号鑑賞（嘶馬集）……………	荒木 洋子	38
春号鑑賞（虹座欄）……………	金尾 景子	39
春号鑑賞（七夕欄）……………	渡邊 午水	40
春号鑑賞（花菜欄）……………	下山 貞子	41
添削教室……………	西 美津子	42

第146回課題句（葉の花）……………

高垣 わこ

43

宮島吟行……………

吉岡 而今

46

馬洗師十七回忌法要……………

創生編集部

48

支部だより……………大柿・出江支部

私の好きな夏の季語……………島 知子

51

オンリーワン……………片島 敦子

51

第4回チャレンジ子ども俳句大会……………

創生編集部

52

太田川例会秀句評……………山口 美智他

54

表紙

①松野自得

雲の峯かさなり湧けり雲の中

②馬洗俳句

③お知らせ

④阿響・課題句募集

カット

野間しげる

草 笛

山口 美智

朗詠のとき草書や風光る

聴き飽かぬ老鶯の声島に老ゆ

竹落葉踏みて尺余の五輪墓

嘶馬集

入園や赤きネクタイ輝きて

草笛や疾うに超えたる父の歳

初夏の光の中に漁す

葉桜や汐木で囲ふ犬の墓

二人きりの集団登校花みかん

余生かく

屋内修一

麦踏の孤影を祈る姿とも
南都詠む八一の歌集建国日
天真の声が闇裂く猫の恋
何の咎ありての連座目刺吼ゆ
国引きの鋤簾とも見え蜺搔
余生かくあれと連翹明りかな
再会の笑みをこぼせば雛もまた

日 永

石井九峰

由緒ある家紋さながら冬の蝶
愛用のペーパーナイフ事務始
生存を互ひに証す賀状かな
雛飾る座り胼胝などなき少女
遠ざかるほどにまろやか沈丁花
妻呼べば先づ猫の来る日永かな
出江俳句会に寄す
第百回句会めでたや花菜風

花の道

菅 風 花

「芝浜」に泣いて笑うておでんかな
恋猫の一夜を修羅であり通す
春光やをんな三人寄るランチ
待ち合はせはミモザ咲くカフェ午後六時
真二つに日と影分かつ春田かな
長閑さや掃除ロボット戻る基地
町屋通り抜けて参道花の道

春
寸
描

米 田 由美子

紅絹で拭く茶托の艶や浅き春
春火鉢旅のてのひら翳しけり
裏声をフォルティッシモに浮かれ猫
窓際が師の指定席カフェうらら
初蝶やをさなは靴を履きたがる
ビストロの小暗きあかり春の宵
帰りには眠たくなる子汐干狩

虹座

—— 同人・五十音順送り ——

山口 美智選



松本直美

太田川

※
冴ゆる夜やはらかに洩るジャズピアノ
冬ごもり余白の広き津和野箋
春めくや切るとき揺るる玉子焼
切長の埴輪のまなこ鼓草
菜の花や玻璃でへだつる運転室

水田満里

山口田

年ごとに糸の切れゆく年賀状
留守長くまづはめだかの春の鉢
節分やもう食べられぬ歳の豆
菜の花のやさしく揺るる風の原因
ミモザの日新聞題字も花飾

宮地瑞穂

瀬戸田

※
今年切りと見慣るる文字の年賀状
海側の席に夫と初電車
合掌の指先冷ゆる雛の忌
風向きのいつか変はりて黄砂くる
十五個のつぼみ迫り出す君子蘭

守田 高生

太田川

念入りに大筆洗ふ年の暮
名園や直ぐに掃かるる落椿
※春光をもち上げ鯉のうねりかな
春寒や外国人のツアー寡黙
切り口をいくつも抱き老桜

山口 ひろ女

太田川

月冴ゆる山頂に雲一つなし
餅搗やあどけなき子の眼が躍る
冬牡丹菰に薄日のとどまりて
下萌の土手一人増え二人増え
桐箱の古き校章春惜しむ

山崎 華園

太田川

いつも夫に遅るる散歩四温晴
床の間の餅の設へ子に託す
まるみみ象の受胎告知や園うら
夜な夜なのまどろみの刻猫の恋
下校時の菜の花畑道草す

荒木 正夫

宗像

艇庫の戸固く閉ざされ冬深し
待春や机上に地図と時刻表
石仏の耳は福耳冬ぬくし
春の雪一本足のフラミンゴ
旅立ちの島の港や花万朶

荒木 洋子

宗像

待春の少年飽かずバット振る
鯰挿すや風の鳴る音軋む音
※受験子を送る無言のハグをして
黒髪に卒業の日の風強し
母キリンに添うて子キリン長閑なり

池田 萩邨

倉掛

春めくやベンチに帽子忘れたり
老梅の一輪庭を独り占め
畑打や未だ元気なり妻もをり
菜の花や沖にタンカー見ゆる丘
草餅を二つ買ひ来て午後三時

七夕

同人

十二席以下は五十音順送り

山口 美智 選



瀬崎 栄子

倉掛

寒栢の途絶えて久し団地かな
ふるさとの山は初雪友訪はな
看取らるることなき友よ雪の花
ささやきと吐息漏れ来る雛の間
＊かんばせの傷戦火くぐりし古雛

通堂 泰子

大柿

庭端を定年の子の耕せり
シルバーの庭木刈込む浅き春
主なき庭に鶯声を張る
＊すれ違ふ媼に蓬の匂ひかな
パリー祭やジャズメロディーの舞踏会

小田 孝子

寿

臘梅の匂ひに引かれ路地裏へ
外出の一步に迷ふ雪もやう
やり残したる事の多さや二月尽
カーテンを開けて身震ひ春の雪
＊税申告終へてデパ地下巡りけり

終活の庭木伐採冬ざる 國 領 隆 男
 梅ふふむ大地の力溜めてをり
 山焼きの火付けは地元消防団
 戦地行くごと編隊を組み鳥帰る
 鯨の尾の揺れさうな春の雨

駐車場借りて街場の出初式 大 野 のりこ
 日めくりの「1」の赤さやお元日
 花ミモザ敬語で話す初デート
 鈍足の吾にまとはりぬ春の雪
 渋滞を詫ぶるガイドや伊勢詣

安眠を誘ふ匂ひや干布団 影 野 盛 子
 天満の梅に見とれて合掌す
 針穴に苦労する糸山笑ふ
 二度三度磨く眼鏡や春霞
 春場所や筋肉の揺れ見とれをり

肩肘を張らずに生きて鏡餅 西 美津子
 首尾はさて爪舐めてゐる恋の猫
 スキップはいつもちぐはぐ山笑ふ
 春雷や五十路改姓との報らせ
 春宵や居酒屋句会など如何

冴返る夜もあかあかと平和の灯 片 島 敦 子
 椿落つ生への思ひしかと出づ
 猫柳おぼろに浮ぶ亡夫の面
 振り返り母はホームへ春の暮
 リラの花ひとに一途でありし頃

牙をむく猛獣のごと氷柱落つ 新 宅 爽 山
 北風に負けじとドアの力込め
 連合ひの亡き静けさや春炬燵
 ものの芽の覆ふ早さや焼きし跡
 今風の雛手に持つスマホかな

新玉の年の朝日を拝みては 角 谷 良 子
 庭にさがす七草粥のひと草を
 薄氷の幾何学模様をりなして
 散策やいつもの場所につくしんぼ
 在りし日の父母写りたる花の下

軒下の風甘くなる吊し柿 鷲 見 葦 月
 馬蹄形に続く稜線山眠る
 水仙の三本生花背を正す
 春炬燵鉤針あみの手のやまず
 花葉風下校の兄らのリコーダー

共鳴句

(七夕欄)

山口 美智

かんばせの傷戦火くぐりし古雛

瀬崎 栄子

戦火を潜り抜けて来た雛を見るたびに、世界各地で起きている戦争で、多くの子どもたちが犠牲になっていることに心を痛めている作者。平和への強い願いを込め、顔に傷のある雛を飾り続けているのである。

すれ違ふ媼に蓬の匂ひかな

通堂 泰子

蓬の匂いのする媼とすれ違ったときの、一瞬を捉えた作品で、匂いだけが鮮明に印象に残る。媼や蓬の香りに懐かしさや安らぎを感じ、郷愁に似た情感がよみがえったのだ。

税申告終へてデバ地下巡りけり

小田 孝子

税申告は歳時記では季語になっていないが、納税期の傍年に申告期とあり、今年は二月十七日から三月十七日の間なので、季感はある。気が重い確定申告を終え、デバ地下で楽しそうに買物をしている作者の顔が浮かぶ。

鯨の尾の揺れさうな春の雨

國領 隆男

鯨は想像上の生き物で、胴体は魚で尾は空に向かってそり返っている。雨で尾が揺れているように感じられ、泳ぎだすのではないか、という思いにさえかられた作者なのだ。

花ミモザ敬語で話す初デート

大野のりこ

初デートの子どもたちが、敬語で話しているのを見て、期

待と不安で緊張した初デートのときのことを思い出したのだろう。明るい黄色の小花で結婚式にもよく使われるという、花ミモザとの取り合わせが絶妙。

二度三度磨く眼鏡や春霞

影野 盛子

眼鏡の汚れではないと気づいた作者は、混然と溶け合う幻想的な春霞の景色に魅了され、しばらく立ち尽くしていたのであろう。

春宵や居酒屋句会など如何

西 美津子

暖かく心も浮き立つような春の宵、居酒屋句会をするときと楽しいことだろう。「創生」創始者の馬洗先生は、超結社の先生方と、毎月お酒を飲みながらの句会を楽しんでいた。

軽妙で洒落な作品。

振り返り母はホームへ春の暮

片島 敦子

親の介護を入居施設に託す決断は、親にとっても家族にとつても、心の揺れることである。振り返りながらホームに行つた母の顔を思い出し、後悔に苛まれている作者。春の暮なら、なおさらだろう。

充電の所作にも似たり日向ぼこ

山野 啓子

寒くて厳しい冬は日向が恋しい。風のない陽だまりで、浴びる日射しはことのほか暖かく、心身が膨らんでくるような感じで、射力が回復してくる。バッテリーの充電と同じで、エネルギーが充電されたのだ。

春の月テトラポッドは人に似て

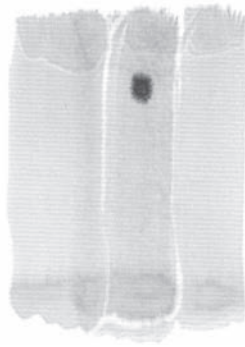
渡邊 午水

海岸浸食を防ぐため、日本中の海岸を囲んでいる人型のテトラポッドが、今の混沌とした世界のなかで、日本を守ろうとしてくれている人垣のように思えたのだらう。

花菜

十三席以下は五十音順送り

山口 美智 選



櫻田 文雄

八幡川

＊ 居酒屋の主鏡のナイターかな
雨粒を留め網戸の点描画
再びの打水をして待ちにけり
甜瓜切りて昭和に齧り付く
穴道湖てふ花器に活けたる大花火

隱木 登美子

舟 入

＊ 秋時雨詩情ゆかしき中也の忌
行く秋やつなぐ手もなき八十路坂
微塵かと紛ふ命の雪螢
終となる住処も独り返り花
終電の音消ゆる街牙返る

今田 脩三

ゆずりは

＊ 母の日や呼べど届かぬ遠い星
父の日の風にかすかな声を聴く
＊ 夏虫や常夜燈下のフラメンコ
炎帝に逆らはずして病み離る
子燕のか細き声や雨催ひ

船重 景子

木もれび

＊ 福は内よちよち来る小鬼かな
道違へてミモザの下のひと休み
豆苗の音によきによきと寒明くる
車窓より髪乱す風山笑ふ
春満月の水面に揺るる海しづか

歩み寄る音に山茶花こぼれけり 安達繁樹
※朝刊のことに重たし初雀
出江

風花や桧皮苔むす庵門
猫犬のごと日だまりの寒の猫
水仙の花に灰塵ロスよりか

山茶花や絨毯のごと道を染め 山下明子
※石段の下から詣づ初社
大柿

夜神楽や若き演者の立回り
砂浜も水面もひかり春隣り
ハワイから届くカードや初御空

今日だけは神さぶるなり初雀 廣津敦子
恒例の三日はカレー母譲り
八幡川

※寝ぬるには早き春の夜ひとりこつ
練り切りと見紛ふ彩や寒椿
胡蝶には胡蝶の夢や空広し

※初氷バケツの中のアート展 山下貞子
さへづりの遠くきこゆる朝寝かな
寿

春炬燵の陣取る客間夫のかげ
しんと降り雪照らす外路灯
かぐはしき匂ひただよふ沈丁花

I S Sを目視で探す冬銀河 梶田文枝
※満目の峰や初雪しらじらと
福寿草
大寒や杖のぼつりと施術室

直売の鱈の干物二袋
今昔や顔シャープなり内裏雛

※懐にすべて納めて山眠る 石丸恭子
雪山を背に悠悠と鷺の行く
可部

雪吹きてつひに町ごと覆ひけり
立春の光射し入る雪の町
全快を祈りことしの雛飾る

蛇穴を出で日溜りの岩を這ふ 中村洋子
水温む瀬戸に揺蕩ふ舳ひ舟
舟入

※我先に伸びて破顔のチューリップ
弥山より見やる瀬戸内若葉風
願はくは八十八夜平らかに

※背を向けて佇む二羽や冬の鷺 天藤わか
童心に返って遊ぶ柚湯かな
八幡川

※句繕ひ暖炉の薪の爆ずる音
蠟燭からLEDへ建国の日
伏し目がちな少年バレンタインの日

共鳴句（花菜欄）

山口 美智

雨粒を留め網戸の点描画

櫻田 文雄

雨後の網戸を見たときの、新鮮な驚きが伝わってくる。誰もが知っている光景であるが、見逃してしまいそうなものに詩を感じ取り、その感動を一句に仕立てている。

終となる住処も独り返り花

隠木登美子

定年後の趣味や暮らしを考え、終の住処に越したときの作者の複雑な心境が、上五中七で伺える。

「返り花」という季語が何ともいえない働きをしている。

夏虫や常夜燈下のフラメンコ

今田 脩三

夜空の月や人工的な光を頼りに動く、夜行性の虫たちが、常夜燈の周りをぐるぐると回っている様子が、フラメンコを踊っているように見えたのだ。

写生の眼が発想の豊かさにつながっている佳句。

福は内よちよち来る小鬼かな

船重 景子

家族の災厄を避け、福の到来を願う豆まきの行事は、家族を一つに結び付ける年中行事の一つである。

よちよち歩きの子が鬼とは、何ともほほえましい。平凡で幸せな家庭が目に見えよう。

朝刊のことに重たし初雀

安達 繁樹

元旦の新聞は特集号や折込チラシも多く、通常の3〜4倍の厚さがある。読みごたえのある元旦の新聞を、楽しみながら読んでいる作者の様子が目に浮かぶ。

石段の下から詣づ初社

山下 明子

本殿へと続く長く急な階段は、異世界への階のようで神秘的であるが、高齢になった作者は上るのが難しく、宮の入口である一の鳥居で手を合わせたのだ。

寝ぬるには早き春の夜ひとりごつ

廣津 敦子

情趣に満ちた春の夜、早く寝るのはもったいないと思う気持ちだが、思わず口をついて出たのだ。ささやかな日常生活の一齣を鮮やかに切り取った作品である。

初氷バケツの中のアート展

下山 貞子

日の光を受けて変化してゆく氷の美しさが、芸術作品のようだと感じた作者。見えたものの、心に触れたものの、そこに自分の心の躍動をも映し出している。